

アドラー心理学にもとづく新教育の理論的独自性

—他派モデルとの比較検討—

鎌田 穰（大阪）

要旨

キーワード：

<はじめに>

先の論文（鎌田、1992）で、わが国で未だ馴染みのない「新教育 parent education」について、「新教育とは、親を対象として、健康な家庭生活を実現していくために必要な、基本的な理念と具体的な知識や技術に関する情報を、積極的に提供し、実践できるように訓練することを目的とした心理教育である」と定義した。当然ながら、アドラー心理学にもとづく新教育もこの例外ではなく、その概略については、拙著（1991）の中で詳述した。

さて、アドラー心理学的新教育は、上述の定義にもとづく諸特徴のみならず、独自の特徴も見られ、それらは、アドラー心理学がもつ独自性に関わるものと考えられる。本稿では、これらの諸特徴を提示し、他派の理論にもとづく新教育と理論的な比較検討を試みる。その中で、アドラー心理学的新教育の独自性を提示していきたい。

<アドラー心理学的新教育>

ここで、アドラー心理学的新教育の諸特徴を、定義に沿って提示しておく。

「親を対象とする」

定義によれば、新教育の対象は親である。アドラー心理学的新教育は、あくまでも親自身の成長に焦点を当てるため、患児指向的アプローチがとる視点とは大きく異なっている。

患児指向的アプローチとは、治療的な新教育の場合に、親のカウンセリングを通じてこどもの行動を変化させることを企図することである。このようなアプローチも親を対象とした親教育であるが、その目標は親自身の人格的成長ではなくて、親に患児の診断と治療を援助させることである（乾、1986, p.114）。これは国内の各種の相談機関で行なわれており、実際には、IP（Identified Patient）であるこどものプレイセラピーまたは個人カウンセリング等と平行して親への面接を設定し、前述のような意味での親教育を実施している。

患児指向的アプローチを最も早く提唱したのは、Freud, A.（1960）であろう。彼女は、母親の

行為の影響が大きい場合には、母親の同時治療が必要である、と述べている。その他、Sandler, et al. (1980, p.261) は、こどもの治療が進むにつれて生じるこどもの変化に親が対処できるよう、親に援助を与えることを目的とした面接の必要性を述べている。

一方、アドラー心理学は、この患児志向的アプローチに対して懐疑的である。なぜなら、患児指向的アプローチは、親にとって都合のいい子にこどもを作り変えようという親の側の支配性を助長する危険がある、と考えるからである。それ故、親にたいするアドラー心理学的治療では、治療目標はこどもの問題の解決ではなく親自身の成長であることを、治療初期の段階で親と治療者との間で確認する。これと同じく親教育も、こどもの行動変容ではなく、親自身の成長をその目標とするのである。

「健康な家庭生活を実現していくために必要な基本的な理念を積極的に提示する」

アドラー心理学は、健康な家族関係のあり方について具体的な理念を持っている。親教育では、この理念を積極的に提示する。

アドラー心理学における理念の中心は、「協働 (cooperation)」についてである。Adler は、様々な著作の中で、夫婦・親子・同胞の間における対等な協力関係を強調している。それだけではなく、"What Life Should Mean to You (1931)" の中で、彼は「協働」を人間の努力の究極目標とさえしている (p.253)。つまり、アドラー心理学が考える健康な家族関係とは、対等性の上に成り立つ協力関係である、といえよう。

萩と鎌田 (1987, p.180) は、これについてより具体的に、「対人関係のありかたを、支配・被支配あるいは保護・被保護の『縦の関係』と、対等で同盟的・協力的な『横の関係』とに大別する。そのうえで、親子は横の関係で暮らすことが望ましいと考える。(中略) 親は自分の人生の完全な責任をとる自立した大人でなければならない。親は親自身の人生を生き、こどもはこども自身の人生を生きること。相互の問題に、頼まれもしないのに介入しないこと。そして、家族メンバー相互の、あるいは家族全員の問題に対しては、相互に協力して理性的に解決できること」が家族カウンセリングの目標、すなわち、親教育の目標であると述べている。

この記述が端的に示すことは、家族内の各人が自分の責任を果たし、かつ家族共同体の維持のために相互扶助的に協力することの重要性である。このような家庭では、親はこどもへの奉仕者ではなく、またこどもは親の所有物ではない、という考えが必要とされるのである。すなわち、大人もこどもも、対等の人間であり、その能力に応じた責任を負い、その責任に応じた権利を持つのである。

これとは別に、近年では、「健康な家族関係」について、家族療法家の研究が知られている。Textor, M.R. (1989) は、諸文献を総括して、人格、認知、行動、コミュニケーション、関係、役割、家族システム、ネットワーク、という側面での健康な状態について議論している。これらは、ある意味では、全て民主的コミュニケーションのあり方を記述したものとみなすことができ、アドラー心理学の理念と一致する点が多い。しかし、これらはあくまでも記述的な研究であって、親教育の中で積極的に目標として提示されるものであるとは限らない。

この他、理念の上でアドラー心理学的親教育と同じ方向性、すなわち、親子間の民主的関係の形成を示すものは、Gordon, T. の PET (Parent Effectiveness Training) である。これとの違いについては、後に詳述する。また、その中でアドラー心理学の独自性を明かにしていきたい。

「具体的な知識や技術に関する情報を積極的に提供する」

アドラー心理学にもとづく親教育は、前述した健康な家庭生活を実現するための理念だけではなく、可能な限り具体的な手だてを提供する。教育されるべき内容は、大別すると、

- 1) 基本的な態度
- 2) 一般的コミュニケーション技術
- 3) 問題解決技術

の3つと考えられる。

基本的な態度とは、こどもの自立や責任感の育成といった育児目標の再確認や、相互尊敬・相互信頼・横の関係・家庭内民主主義という家族の暮らし方についての理念などである。

一般的コミュニケーション技術とは、話の聞き方、勇気づける言葉かけ、相手を傷つけずに自己主張する方法などである。

問題解決技術とは、こどもの問題行動の目的の分析法、親の感情の処理法、ルールを制定する方法などである。

ここで述べられている3つの内容は、他派の親教育プログラムの中でも扱われていることであるが、内容的に共通するものと異なるものがある。それらの相違については、後に触れる。

「実践できるように訓練する」

アドラー心理学にもとづく親教育は、プログラム式のグループによるものだけではなく、親に対する個人カウンセリングの場合であっても積極的な教育であり、情報を提供するだけではなく、ロールプレイによって実習し、あるいは宿題を課し、それらを材料によりよい対応法を検討するなどして、親を訓練する。このような訓練は、先に挙げたPETや行動主義の親教育プログラムでも行われるが、その内容については、各プログラムによって様々であり、また、共通した内容も持っているものもある。

さて、どのプログラムにおいても、訓練である限りそれは指示的であるが、決して強制的ではない。理念なり技術なりは、提案されるのであって、命令されるのではない。すなわち、それらを受け入れるかどうかは、その親の自由である。いつでも親には最終的な選択の自由が保証されているのである。

<アドラー心理学的親教育と他の親教育との理論上のちがい>

以上、親教育の定義に従い、その特徴を示してきた。親教育として有名なものは、Fine, M.J. (1980) があげるように、アドラー心理学のもの、Ginott, H.G. のもの、ロジャース派のもの、交流分析のもの、行動主義のものがある。これらの中でも特に実用化されているものは、アドラー派のもの、ロジャース派のもの、そして行動主義のものである。以下、内容的な違いについて、比較検討を加えていく。

	ロジャス / ゴードン	アドラー / ドライカース	行動主義
基礎理論	原因論	目的論	原因論
理想的家族	民主的関係	民主的関係	定義なし
理想的親子	対等	対等	上下
健康な家族像	ある	ある	ない
感情的葛藤	注目する	注目しない	注目しない
目標	感情的葛藤なし	責任 / 協力	問題行動なし
形式	個人 / 集団	個人 / 集団	個人 / 集団
指示性	非指示的	指示的	指示的
着目点	感情	態度 / 責任	行動

(表 1 : 各派モデルの理論的比較)

● 理論上の比較

各モデルの基礎理論の差が各々を特徴づけているが、アドラー心理学モデルを最も際だたせているのは、目的論であろう。ロジャース的モデルも行動主義的モデルも、ある問題行動を生じさせているきっかけを過去の原因に求めるが、アドラー心理学的モデルは、不適切な行動を生じさせるものを未来の目的に求める。ロジャース派のモデルは、親子間のトラブルは、感情的葛藤が原因であると考え、個人の内的な感情のあり方に着目し、親子間で感情的葛藤のない状態を作り出すことを目標にしている。行動主義モデルは、問題行動は学習され条件付けられたものとして捉えるため、個人の内面には注目せず、学習理論に沿って、問題行動を消去し、望ましい行動を形成していくことを目標とする。一方、アドラー心理学的モデルは、感情や不安や葛藤のみならず、全ての行動は個人の目標追求のために作り出される手段として捉えるため、個人の内面よりもそれらを作り出す個人の態度および責任に着目する。それ故、目標は、親が自らの責任を果たすようになり、こどもとの間に協力関係を形成することである。

このように、ロジャース派と行動主義のモデルは、心理教育モデルとして解決指向型アプローチ(野田、1992)に属している(鎌田、1992)とはいえ、親子間トラブルまたは問題行動を形成する原因の除去または改善にこだわりを示しており、問題指向型アプローチに近い。一方、アドラー心理学的モデルは、その理論的な方向性の故に、より積極的に解決目標の提示に重点を置いている。

● 理念上の比較

他派のモデルの中で、理念的にアドラー心理学的モデルと最も類似しているのは、ロジャース派に属する Gordon, T. の PET であろう。類似点は、家庭内民主主義の確立を全面に押し出している点である。行動主義モデルは、このような理念に関する定義は示されておらず、健康な家族像をもっていない。

アドラー心理学的モデルでは、健康な家族関係として、相互尊敬・相互信頼の上に成り立った対等な協力関係が定義されており、これが積極的に提示される。話しの聞き方や主張方法などの親に供給される様々な技法も、協力関係形成のためのものである。

また、アドラー心理学は、共同体への破壊行為のみを不適切な行動と規定し、それ以外の行動は全て適切な行動として捉える。このように、アドラー心理学自体が行動の適切・不適切についての基準を持っているため、ときに、親が不適切と考えているこどもの行動でも、アドラー心理学からみた場合、不適切と捉えられない場合がある。例えば、こどもが不登校状態にあっても、この登校しないという行為自体は共同体への破壊行為ではないので、不適切な行動とは捉えられ

ない。このように、アドラー心理学的モデルは、こどものあり方にたいする親の価値観の再教育を行っているといえよう。

一方、行動主義モデルでは、このような理念を理論自体がもっていないため、親が不適切と考えるこどもの行動を、親が適切とみなす行動に変容させることを目的とする。これは、親にとって都合のいい行動を形成し、親の価値をこどもに押しつけることになりかねず、親の支配性を助長する危険性が高い。それ故、親子の基本的関係は上下の関係となっており、他二つのモデルと異なっている。

● PET との比較

ロジャース派の代表的プログラムは PET であり、ここでは PET とアドラー心理学モデルとの比較をおこなう。この二つのモデルは、上述のような理念的類似性を示すにもかかわらず、実際の内容を見ると、かなり趣を異にしている。その相違を端的に言えば、田中らが指摘したように(田中・堀、1989)、親子間の感情的葛藤状態に対するアプローチの違いであろう。Gordon (1990) が、「受容」が親のこどもに対する基本的な援助的態度である、と述べているように、PET は親子間の感情を重要視している。そのため、親子間の感情的葛藤状態の解消を目標とし、親は葛藤解決のためのコミュニケーションを増やすのであろう。なお、このような葛藤解決の重視が原因論的視点から導き出されていることは、先に述べた通りである。

一方、アドラー心理学的モデルでは、感情や葛藤は目的追求のために使用される道具である、と考えられるため、親子双方の感情的な葛藤の直接的解決は重要視されない。その代わりに、親子双方の自立を目標とするため、親とこどもが自らのとるべき責任をあきらかにし、それを遂行すること、を第一義的に重視する。そのため、できる限りこどもの課題に親から踏み込むことを避けるように親を方向づけている。このようなことから、親は、葛藤場面で引き下がる態度を示すようになるのであろう。また、葛藤場面やトラブル状況の分析に重点を置かず、解決目標となる親子のあるべき姿を積極的に提示することは、目的論的視点のみならず、自己-世界認知を自らの主観によってのみ行うという現象学的視点と、今ここでの決断によって自他の関係を構成するという実存主義的視点に立脚するが故である。すなわち、現在の状況は、自分の主観によって判断し、選択し、作り上げてきたものであるから、今後の家族のあるべき関係も自らの捉え方を変え、選択し、構成することができる、と考えるのである。

以上から、健康な家族関係という点からすると、PET は、親子間で感情的葛藤状態がないことを目指している、といえよう。一方、アドラー心理学的モデルは葛藤状態があったとしても、親子のお互いが自らの責任を果たし、その上で親子間の協力関係を形成していくことを目指している、といえよう。

● 行動主義モデルとの比較

行動主義では、こどもの問題行動は、学習された習慣であると仮定されている。そこで、治療は、こどもの行動を直接的に変容させていくことを目的とし、技法としては、強化子とその除去を用いた(罰を用いない)条件づけを利用する(Patterson, R., 1971 ; Hoffmam, N. & Frese, M., 1975)。詳細な行動診断を行い、一定の科学的な方法で治療計画をたて、治療者がリードし、コントロールし、操作することによって、積極的に患者をある方向へ変化させようとする(祐宗、春木、小林編、1972)。親教育は、こどもの問題行動を直接改善していくために、親を補助的治療者としてトレーニングすることを目的とする(Berkowitz, B. P. & Graziano, A.M., 1972)。

このような行動主義モデルとアドラー心理学的モデルとの最も大きな差は、理念のあるなしということであろう。逆に、行動主義がもちいる主張性訓練などの技法をアドラー心理学的モデル

は積極的に取り入れている。すなわち、同一の技法を用いるとしても、その用いる目標に差があるのである。

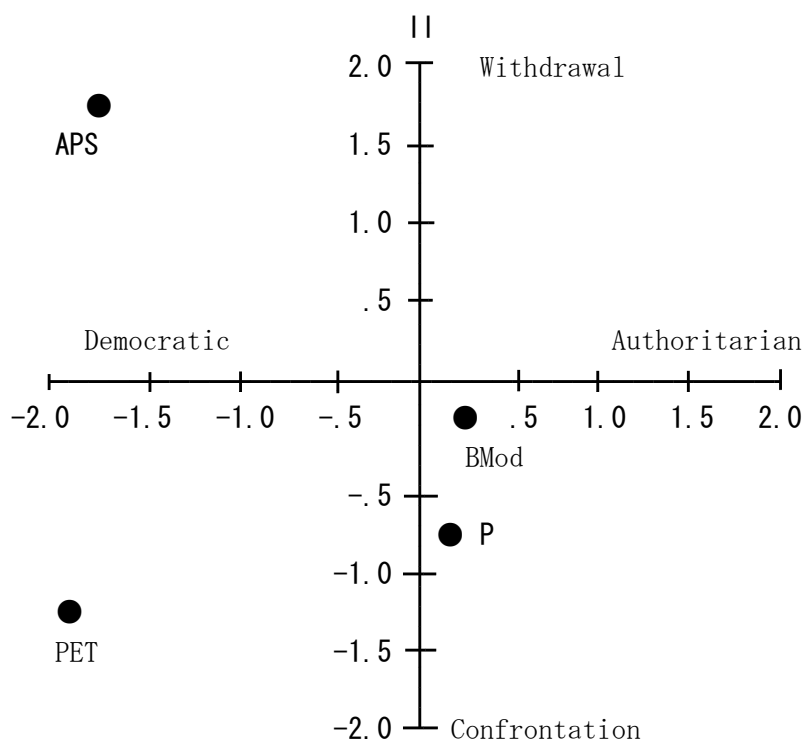
● PET、行動主義的モデル、アドラー心理学的モデルの比較

Schultz, C., Nystul, H. S. & Law, H. G.(1980) は、アドラー心理学的親教育(APS)、ロジャース的な親教育である PET、行動主義的観的親教育 (BMod) の各参加者、プラセボ・グループの参加者 (P)、およびグループ非参加者 (NAC) の態度変化を測定した。その結果は、図 1 に示すような、こどもとのコミュニケーションにおける民主的 democratic な態度と権威的 authoritarian な態度の横軸と、葛藤解決における積極的 confrontative な態度と引き下がり with-drawal な態度の縦軸によって、示されている。

これによると、アドラー心理学的親教育と PET の参加者は他のグループよりも民主的態度を身につけている。アドラー心理学的親教育の参加者は、他に比べ葛藤解決についての引き下がり態度を身につけている。PET の参加者は、他に比べ葛藤解決について積極的態度を身につけている。行動主義モデルおよびプラセボ・グループの参加者は、どの軸においても中間的位置を示した。非参加者は最も権威的態度を示し、縦軸ではどの傾向も示さなかった。

これらの結果は、先の考察内容を支持するものである。

図 1 : 各モデルによる親の態度変化の比較



(Schultz, C., Nystul, M.S. & Law, H.G., 1980 より転載)

<結語>

アドラー心理学的親教育の独自性のひとつは、責任性を重視する協力関係の形成を目標にしていることであろう。アドラー心理学的モデルの特徴のひとつは、家庭内民主主義の確立であり、これは PET の理念と同じものである。しかし、PET が親子間の感情的葛藤状態の解決を重視するのに対し、アドラー心理学モデルは、親は自らの責任を果たし、こどもとの間で、相互尊敬・相互信頼の上に成り立った対等な協力関係の形成を重視する。すなわち、個人の内面における葛藤に注目するのではなく、態度と責任に焦点を当てるのである。ここから、こどもとの間で直接的に葛藤解決をおこなうのではなく、むしろ、葛藤場面から引き下がる態度の形成を促進しており、これがアドラー心理学モデルの独自性を現している、といえよう。

今ひとつは、上述したような健康な家族像を積極的に提示する、解決指向型アプローチであることであろう。これは、アドラー心理学の目的論的立場、現象学的立場、実存的立場と関連するものである。他方、他派のモデルは全て原因論的立場をとり、アドラー心理学モデルに較べ、問題指向型アプローチに近いものとなっている。

<文献>

- 1) Adler, A. (1931): WHAT LIFE SHOULD MEAN TO YOU, Boston: Little, Brown & ComPany (高尾利数訳、人生の意味の心理学、春秋社、1984)
- 2) Berkowitz, B. P. & Graziano, A. M. (1972): TRAINING PARENTS AS BEHAVIOR THERAPISTS A REVIEW, Behavior Research & Therapy,10,297-317
- 3) Fine, M. J. Eds. (1980): HANDBOOK ON PARENT EDUCATION, Academic Press
- 4) Freud, A (1960): 予防と啓蒙のセンターとしての児童指導クリニック (牧田地訳、アンナ・フロイト著作集、第8巻、ハムステッドにおける研究下、1983,pp16-31)
- 5) 萩昌子、鎌田穰 (1987) : アドラー心理学による家族カウンセリング、日本心理臨床学会第6回大会 (名古屋大学) 発表論文集、180-181
- 6) Hoffmann, N. & Frese, M. (1975): VERHALTENSTHERAPIE IN DER SOZIALARBEIT, Ottomueller Verlag, Salzburg (日本語版、行動療法の理論と演習、京都国際社会福祉センター訳、ルガール社、1978)
- 7) 乾吉佑 (1986): 私の行っている家族とのかかわりー精神分析的並行父母面接の経験からー (大原健士郎・石川元編、家族療法の理論と実際 I, pp 105-128)
- 8) 鎌田 穰 (1991): アドラー心理学にもとづく親教育、アドレリアン、5(2), 23-33
- 9) 鎌田 穰 (1992): 親教育の概念をめぐって、阪市大児童・家族相談所紀要、1992、脱稿中
- 10) 野田俊作 (1992): 共同体感覚の諸相、アドレリアン、5(2), 79-85
- 11) Patterson, R. (1971): FAMILIES: Applications of Social Learning to Family Life, Research Press Co. (家族変容の技法をまなぶ、大湖憲一訳、川島書店、1987)
- 12) Sandler J., et. al, (1980): THE TECHNIQUE OF CHILD PSYCHOANALYSIS, DISCUSSINS WITH ANNA FREUD (日本語版、作出勉訳、児童分析の技法、星和書店、1983)
- 13) 祐宗省三・春木登・小林重雄編 (1972) : 行動療法入門、川島書店
- 14) Textor, M.R. (1989): THE 'HEALTHY' FAMILY, Journal of Family Therapy, 11, 59-75

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載